

巻 頭 言

所 長 就 任 挨 拶

谷 安 正



谷 所 長

この3月31日で星合教授が所長としての3ヶ年の任期を終えられたので、教授協会の推挙により私がその後任として当ることになった。全く思いもかけなかったこととしてこの研究所としての数々の問題の解決などにふれる用意もない。ただ所長就任に当たり二、三私の所感を述べたい。

当研究所設立の目的についてはすでに過去三代の所長がその就任に当り述べてこられたところであり、また全所員が体得されていると思うので、いまさら私から喋々として弁ずるにも当たらないことであろう。そして瀬藤、兼重、ついで星合と歴代の所長の賢明なる指導のもとに当を得た途をたどって歩み続け、苦難ではあったがどうやら目的とする研究所としての体制も整い、またおいおいに成果が現われ、前途はまだ遠いがまづ軌道にのって来たといつてよいだろう。

具体的に当研究所の特色である所内の総合研究、中間試作研究ならびに委託研究について1954年以後の実績を見ると次のようである。

各教官に配布さるべき予算の約40% (約800万円) をさいて、これを重要にしてかつ費用のかさむ研究に重点的に注入してその研究の促進をはかる中間試験研究については、この3ヶ年に35件あり、これらは工業あるいは工学の広い分野にわたっており、それぞれその成果が実用化され、あるいは所内の共通研究施設として役立っている。そのうちの若干を拾いあげると微分解析機の拡大による演算能力の向上、高速度カメラによる高速現象の解析、ラジアルガスタービンの試作、接合型トランジスタの製法、電子管式擬似トラフィック実験装置の試作、自動制御の応用研究、工業分析自動化の研究、床版試験機の試作等があげられる。

また数多くの総合研究が行われてきているが、これらについては星合前所長が3年前すでに本誌に書いていられるので、あらためていうまでもないが、総合研究によって所員の研究活動を結集して問題の処理に当り、機に応じて対外活動のできる体制にある。1954年以後のものについて最も顕著なのはSounding Rocket (SR) 研究班であろう。1957年から1958年にわたって行われる国際地球観測年における二大行事の一つとして、南極観測とならんで行われる上空の状況の観測のためのロケット打上げは、すべて当研究所の手によって行われることになっている。ロケット観測が可能な国は世界中ごく少数に限られているのである。この観測について国際的にA級に仲間入りできたことは当研究所にこのような総合研究班が結成されていたためといつてもいい過ぎではなからう。

また委託研究については国費によって賄うものと奨励会よりの委託の分をあわせて件数は毎年80件前後であつてこれらの研究を通じて工業に直接的な寄与をなしてきている。そして件数は余り増減しないが委託研究費は昨年度においては倍加している。もちろんこれには神武以来といわれた昨年度の工業ブームの影響もあろうが、その内容を調べるとダムの強さとか、原子力機器に関する基礎的資料に関する研究などの基礎的研究が次第に多くなっていることから、ブームの影響とは全面的にいえぬものがある。これらはわれわれにとっては力強いことである。といつてもわれわれは委託研究の多きを徒らに誇るものではないが、このことはわれわれの実績が多小なりとも認められてきているからともいえるのではなからうか。

次に定員についてであるが行政整理ごとに定員が減らされ当研究所発足当時に比べ補助研究員の人員が著しく減少し各研究者の研究能力が低下し、当所にとっては最も大きな問題となつてきた。科学研究の促進という口の下から具体的にはこれを退嬰させるようなやり方をする当局の態度には全く済度し難いものがある。しかし徒らに憤激してはじまらない。ひるがえって考えると、当局といつても国民全体の平均の意向を代弁するものと考えるべきであろう。したがってわれわれとしても多大の不平もあろうが、訴うるべきは強く訴え、あとは徐々に国民の理解を深めるべきであろう。幸い国民の科学研究の尊重の気持は一般的にいって高まつてきていることは事実である。しかし研究者だからといって人間的に特権があるわけでもなく、また特権意識をもつべきでもない。規模の大きな研究であればあるほど、それだけに責任が重い。研究者は自然に対して謙虚でなければならぬと同時に対人的にも謙譲でなければならぬ。

自分自身に対していいかせる独言になつてしまった点をお詫びする。